

Platform

バイオテクノロジーの 新たな利用を考えるオープンラボ

バイオテクノロジーが、健康や医療、農業、環境といった地球規模の問題解決に役立つ技術として注目される一方、ファッション、アート等とのコラボレーションで新たな価値を創出する動きが世界中で起きている。日本でも、クリエイティブサービスを通じて社会にアプローチする株式会社ロフトワークが運営する、ものづくりカフェクリエイティブコワーキングスペース「FabCafe MTRL」内にバイオテクノロジーに特化したプラットフォーム「BioClub」を受け入れ、バイオハザードレベルP1を満たすラボを気鋭の研究者やバイオテクノロジーをクリエイティブに利用したい層に向けて開放し、ユニークな存在感を放っている。



BioClub

<http://bioclub.org/>
毎週火曜 19:00～東京・渋谷のFabCafe MTRLにて一般参加も可能な「BioClub Weekly Meeting」を開催中。

Book

化学物質とのお付き合い 上手に続けるには

化学物質といってもよくわからないという人も多いだろう。逆に言えば、それほど当たり前にも馴染み、私たちの暮らしを「包み込む」存在とも言える。本書は、農業、化学肥料、プラスチック、合成洗剤、家庭用の殺虫剤といった身近な化学製品の貢献と、化学物質による被害例をわかりやすく紹介するとともに、関連する法律の現状や、今後の管理はどうあるべきかも解説。著者の浦野紘平氏（横浜国立大学大学院環境情報研究院教授）は、公害資源研究所（現産業技術総合研究所）を経て、国や自治体の多数の環境関係委員として活躍する人物だ。化学物質と上手に付き合うための指南書として役立てたい。



「えっ! そうなの?! 私たちを包み込む化学物質」

浦野紘平、浦野真弥 共著
コロナ社 (2017年) 2,700円 (税込)

Technology

下を向いて歩こう SNSを使ったごみ拾い

2011年に京都大学の環境問題の研究室から誕生した「ピリカ」は、スマホのアプリを使って、ごみを拾った場所、ごみの種類と数、写真を投稿できるソーシャルネットワーク。アプリをダウンロードすると、タイムライン上には今この瞬間に世界中でごみが拾われている様子が表示され、コメント投稿によるバーチャルな連帯感も生まれる。個人での参加はもとより、自治体や企業との連携も進み、今では世界79カ国に拡大し、約7,500万個のごみが拾われている（2018年1月現在）。ピリカはアイヌ語で「美しい」の意。その言葉どおり美しい町が増えることで環境問題の解決に貢献できるしくみだ。



ごみ拾いSNS 「ピリカ」

<http://sns.pirika.org/>

Activity

公害資料館の連携で 経験からの学びを促進

水俣病などの公害が激甚だった頃から半世紀が経過し、経験の風化が危ぶまれている。また、日本国内だけでなく、経済発展著しい新興国では現在進行形で公害が発生しており、過去から学ぶことが改めて必要とされている。そこで、全国16カ所の公害資料館によるネットワークを2013年に発足。これは、各地の公害資料館等が実践してきた「公害を伝える」取組を共有し、多様な主体と連携・協働しながら公害を学ぶ意義を全国そして世界に発信することを目的にしている。これまで新潟・富山・四日市・水俣・大阪と、かつての公害発生地でフォーラムを開催し公害教育の可能性について議論してきた。



公害資料館連携 ネットワーク

<http://kougai.info/>
第5回公害資料館連携フォーラムの様子